

基礎に戻る

||

本質に戻る

☆ 後退するのではなく  
前進すること。

### < 豆腐の比喻 >



Simpleで原始的な生活

文明の毒に冒された環境から

自分を切り離して、真の

文明人として 自分と向き合う。

↳ civilized person

### < 深遠なる思索のために >

- ・ hungry 精神が必要
- ・ 余計なもの (文明の毒、物質的価値観...) は不要
- ・ 余計なお金があると哲学の邪魔
- ・ 満たされている人は根本の根本について哲学をしない。

金持ち

— (十分あるのに) もっとお金を貯めよう、増やそうとする。

けずだから お金が貯まる。

↳ 社会のため、公共のためではなく  
私利私欲のため

死んだら お金は持って行かないのに ...

human greed => human nature

人のためにお金を使う人 (社会)

... お金が貯まらない。

(必要なもの以上は  
得ようとしない)

→ 余計なものを所有しないからこそ  
物事の本質 (根本の根本) について  
哲学ができる。



人間は 見ているつもりでも、物事の

大切なことを相当見過ごしている。

目があっても物事(の奥にある本質)を  
見逃している。

↓ そのためには

見識を養う。

||

基本に戻る。

謙虚に、厳粛な姿勢で

自分を見つめること。

豆腐の揚げ方。

★ 銀座書斎で...

生け花や植物にバツかる人。

(物事を) 見えていない証拠。

飾られたモノに込めた思いを踏みにじる行為。

思案のためには 在野の精神 を基盤とする

権力者、政治家は 人々の幸福のために政治を行うべき。

< 古代ギリシア時代 >

< 古代ローマ時代 >

共通: 戦争で塗りかえられた歴史

暴力・戦争の時代



「正義とは何ぞや」  
という発想が生まれる。

「知」で世の中を制した。

知の源泉 → 「哲学」

セネター (senator) : 元老院議員

政治家 = 戦士

「暴力」で世の中を制した。

前7c.頃: ポリス(都市国家)の  
繁栄

小国・地方自治体  
ex) アテネ・スパルタ



↓

## <古代ギリシア時代>

異なるポリス同士は常に戦争状態。

しかし

↓ 同一ポリス内にはハルモニア（調和）の構築・実現という共通観念。



その源泉となるのが

**アクロポリス** (ex. アテネ・パルテノン神殿)

小高い丘の上に建つ 守護神を

崇めている場所。

「同じポリスを盛り上げて行こう！」という  
共同意識が生まれる。



# < 古代ギリシアで「知」が誕生する背景 >

ディケイ (正義) の追求のためには

スコレー を持っているといけな

↓ (自由に存る時間 : 暇)

社会的地位 (特権階級) を示す証

※ 特権階級 : 奴隷をかかえてスコレーを持っている

(労働者・奴隷には自由時間が無い)

スコレーを持つ自由な立場で思索をする

||

哲学の源泉の源泉

(思索活動)

↓

イオニア・ピタゴラス派 自然哲学の誕生  
(一般的には哲学の源) (科学)

スコラ (ギリシア語: scholē) 12c.以前

余暇・討論 → 討論・教育に使う余暇・自由時間

スコラ(哲学) (ラテン語: schola, 学校) 中世

中世ヨーロッパで、教会・修道院付属の学校や大学を中心として形成された神学・哲学の統称。

教会の権威を認め、教義の学問的根拠づけを目指し、13世紀のトマス・アクィナスにおいて集大成された。(大辞林)

スクール (英語: school)

★ ヒマ(スコラ)がないと学問できない

(→ 労働・生産ばかりの忙しい学問できない)

# <古代ギリシア哲学の流れ>

神話時代 (ギリシア神話)      ハシオドス『神統記』  
イメージに満ちた非合理的な説明



哲学の源泉の源泉 (思索活動の礎)  
「スコレーを持って自由な立場で思索する」



(哲学)  
自然科学の誕生 (イオニア地方・ミレトス学派)

「アルケー (自然の根源) とは何ぞや」

- タレス 「万物の根源 (arche) は "水" である。」  
(B.C. 624? - 546?)
- アナクシマンダロス 「to apeiron (無限なもの)」  
(B.C. 610? - 540?)
- アナクシメネス 「空気である」  
(B.C. 585? - 528?)
- ヘラクレイトス 「火である」  
(B.C. 540? - 475?)
- デモクリトス 「原子論」  
(B.C. 460? - 370?)



人間哲学の始まり (B.C. 5c. ~)

プロタゴラスを代表とするソフィストたち

↓ 「人間は万物の尺度である」

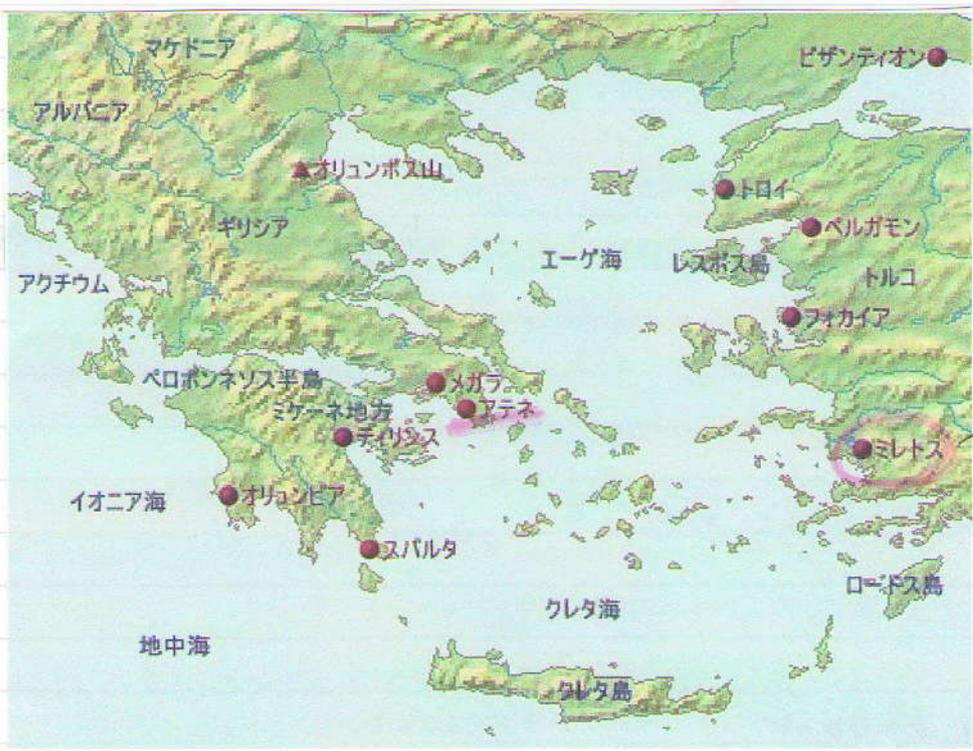
# 古代ギリシア哲学全盛期

- ソクラテス
- プラトン
- アリストテレス

「ロゴス(ことば)」による  
合理的・統一的説明

歴史的プロセスがあり  
ソクラテスが生まれた。

スコラーの使い方を  
誤ったソフィスト達を  
是正するために  
ソクラテスが真の哲学を  
構築した。



イオニア地方  
ミレトス学派

# < 真の "internationalization" とは? >

internationalization

~の間 国家の ~させる

国と国に相互関係を結ばせる: 国際化

international

~の国 国

⇒ 国と国の間には何も無い

↳ 国際化とは?

実体がない (中身が何も無い)  
実際は何もないもの

何も無い 隙間には...

philanthropy

人類愛の実現

internationalization : 地球規模の見識と教養を養う。

||

「cultivation」のこと。

ex) 国際政治学

↳ 政治学を学ぶなら 国際的比較は当然のこと。

安易に「国際」をつけることには 上辺だけの見識にはしなう。

< 知の歩み ... 3つの Stage > (復習)

① cultivation (= internationalization)



自分自身の教養を養う=とにより  
civilizeされる.

② civilization

「文明社会に生きているのに文明人ではない」と感じる時



X 文明の利器に頼る.



O 原点に戻る  
自然と対話する.

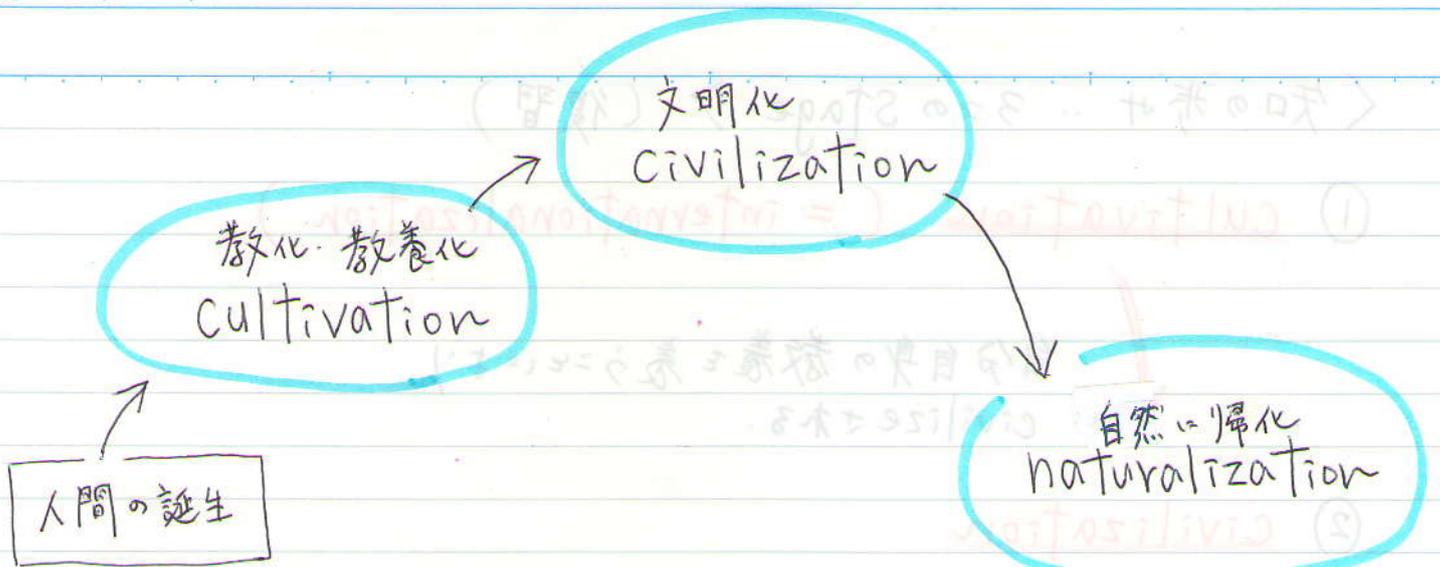
人間は常に原点(初心)に  
戻って文明人になるための  
思索をしなければならぬ.

③ naturalization

哲学的意味 : 本来自分がおさまるべき所におさまって  
自己実現を図ること.

Going back to nature to naturalize shall be  
treated as naturalization.

\* 人によって naturalization は何かが異なる.



自己実現

||

進化の上での前進

(基礎に戻る)  
||  
本質に戻る)

naturalization

高次の cultivation のこと。

通る所を通った上での人類愛のための cultivation

国際化のための cultivation.

理性的存在者として "畑を耕す" こと。

Do not back to nature to naturalise  
treated as naturalization.

# 古代ギリシア哲学の流れ

## 1. 神話におけるコスモゴニア(宇宙生成説)

[神話上の宇宙生成の説明]

「まず」原初にカオスが生じた

混沌

さつぎに胸幅広い大地(ガイア)

↳ 1人の神

雪を載くオリュポスの頂きに宮居する

八百万の神々の常々に揺るぎない御座なる大地と

路広の大地の奥底にある腹わたるタルタロス

↳ 地獄

さらに不死の神々のうちでも並がなく美しいエロスが

生じたもうた。...

ヘシオドス『神統記』  
(岩波文庫 pp.21-22)

カオス(混沌)



ガイア(大地)

1人の神の誕生

↑  
タルタロス(地獄)

↓  
エロス(愛)

神話

… 比喩・イメージに満ちた非合理的な説明



「神話的な表象を通じた理性的洞察の試みの萌芽」

## 2. 自然科学(哲学)の誕生

科学 = 学問 = 哲学

Science

### 哲学の源泉

「愛知 philo-sophia (知を愛する)」

としての哲学は、宇宙・世界・万物の

アルケー (arche) の探求として はじまる。

起源・根源・始源・根拠

原理・原質・はじめ・あおもと

### 思索活動の礎

scholē を持って自由な立場で思索する

↳ ㊦ 余暇 = 討論・教育に便う自由時間  
(社会的特権階級の証)

scholē → schola → school

㊦ 神学・哲学

㊦ 学校

イオニア・ミレトス学派 自然哲学の誕生へ